

『韓詩外傳』注釈 (卷一)

吉田照子

凡例

卷一

○本稿は、四部叢刊本の『韓詩外傳』十巻を底本とし、漢魏叢書本の同十巻を参照した。

○岡本保孝著『韓詩外傳考』(京大文学部図書館蔵)は『考』と略す。

○伊東倫厚著『韓詩外傳校詮』(一二) (北大文学部紀要26)は「校詮」と略す。

○頼炎元著『韓詩外傳今註今譯』(台湾商務印書館)は『今註今譯』と略す。

○陳子珂著『韓詩外傳疏證』(文淵樓叢書)は『疏證』と略す。

○陳喬樞著『韓詩遺說攷』(三家詩遺說攷)は『遺說攷』と略す。

○馮登府著『三家詩異文疏證』(皇清經解)は『異文疏證』と略す。

○王先謙著『詩三家義集疏』(中華書局)は『集疏』と略す。

○臧庸著『韓詩遺說』(新文豐出版)は『遺說』と略す。

○内野熊一郎著『漢初經書學の研究』(清水書店)は『研究』と略す。

一 曾子仕於莒、得粟三秉。方是之時、曾子重其祿而輕其身。親没之後、齊迎以相、楚迎以令尹、晉迎以上卿。方是之時、曾子重其身而輕其祿。懷其寶而迷其國者、不可與語仁。窶其身而約其親者、不可與語孝。任重道遠者、不擇地而息。家貧親老者、不擇官而仕。故君子橋褐趨時、當務爲急。傳云、不逢時而仕、任事而敦其慮、爲之使而不入其謀、貧焉故也。詩曰、夙夜在公、實命不同。曾子^①、莒に仕へ、粟三秉^②を得。是の時に方りて、曾子、其の祿を重んじて其の身を輕んず。親、没するの後、齊、迎ふるに相を以てし、楚、迎ふるに令尹を以てし、晉、迎ふるに上卿を以てす。是の時に方りて、曾子、其の身を重んじて其の祿を輕んず。其の寶を懷きて其の國を迷はす者は、與に仁を語る可からず。其の身に窶^③し其の親に約なる者は、與に孝を語る可からず。任重く道遠き者は、地を擇ばずして息す。家貧しく親老ふる者は、官を擇ばずして仕ふ。故に君子、橋褐^④して趨く時、當務^⑤、急と爲す。傳に云ふ「時に逢はずして仕ふは、事に任じて其の慮を敦くし、之れに使はれて其の謀に入らず、貧しきが故なり」と。詩に曰く「夙夜、公に在り、實に命、同じからず」と。

①「曾子仕於莒」「校詮」は、曾子における仕官と孝養の絡み合いを述べたものに、「韓詩外傳」(以下「外傳」と略す)七卷七章と「莊子」寓言篇が、また曾子が子路に入れ替えられた話として「說苑」建本篇と「孔子家語」致思篇があり、またその「枯魚銜索」以下の全文は「外傳」一巻十七章に重見する、と言う。

②「懷其寶而迷其國者」「考」は「論語陽貨篇文、國作邦、無者字」と言う。
③「窘其君而約其親者」「考」には「卷七、夫信其志約其親者、非孝也。与此自異。論語里仁篇、不仁者不可以久處約」とある。

④「任重道遠者」「考」には「論語泰伯篇文。家語致思篇、子路見於孔子曰、負重涉遠、不擇地而休、家貧親老、不擇祿而仕。又此卷七載曾子之言曰、故家貧親老、不擇官而仕。蓋此皆古語、而子路曾子並用之也。太宰純注家語云、韓詩外傳爲曾子之言者恐非必然。列女賢明周南之妻傳、家貧親老、不擇官而仕、親操井臼、不擇妻而娶、故父母在當與時小同云々。是周南之妻引古語、置故字、以別于己言、亦可以証也」とある。

⑤「橋褐」漢魏叢書本は「橋褐」に作る。「校詮」は、この意味解釈についての諸説を紹介・比較して「考」の「言急疾也」を是とされる。
⑥「當務爲急」「考」に「孟子盡心上篇、知者無不知也、當務之爲急」とある。

⑦「任事而敦其慮」「校詮」は「荀子」議兵篇の「凡慮事欲孰」を挙げる。
⑧「詩曰、……」「詩經」召南、小星篇。「異文疏證」に「鄭氏康成云、趙魏之東、寔實同聲」とある。

二 傳曰、夫行露之人、許嫁矣。然而未往也、見一物不具、一禮不備、守節貞理、守死不往。君子以爲、得婦道之宜。故擧而傳之、揚而歌之、以絶無道之求、防汚道之行乎。詩曰、雖速我訟、亦不爾從。

傳に曰く「夫の行露の人、許嫁す。然して未だ往かざるとき、一物も具はらず、一禮も備はらざるを見、節を守り理を貞り、守

死して往かず。君子以爲く、婦道の宜を得たりと。故に擧げて之れを傳へ、揚げて之れを歌ひ、以て無道の求めを絶ち、汚道の行ひを防ぐかな」と。詩に曰く「我を訟に速くと雖も、亦た爾に従はず」と。

①「傳曰」「疏證」は、本章の類話として「列女傳」召南申女を挙げる。「校詮」は、五十餘條にのぼる「外傳」の「傳曰」のうち陳澧が解した詩傳(『東塾讀書記』卷六)に該当するのは、本章の一條のみ、と言う。「研究」は、この傳は詩經古在説に拠る、と言う。

②「詩曰、……」「詩經」召南、行露篇。

三 孔子南遊、適楚、至於阿谷之隧。有處子佩瑱而浣者。孔子曰、彼婦人、其可與言矣乎。抽觴以授子貢、曰、善爲之辭、以觀其語。子貢曰、吾北鄙之人也。將南之楚、逢天之暑、思心潭潭。願乞一飲、以表我心。婦人對曰、阿谷之隧、隱曲之汜、其水戴清戴濁、流而趨海。欲飲則飲、何問婦人乎。受子貢觴、迎流而挹之、奐然而棄之、促流而挹之、奐然而溢之。坐置之沙上、曰、禮固不親授。子貢以告。孔子曰、丘知之矣。抽琴去其軫、以授子貢、曰、善爲之辭、以觀其語。子貢曰、嚮子之言、穆如清風。不悖我語、和暢我心。於此有琴而無軫。願借子以調其音。婦人對曰、吾野鄙之人也。僻陋而無心。五音不知。安能調琴。子貢以告。孔子曰、丘知之矣。抽絺紵五兩、以授子貢、曰、善爲之辭、以觀其語。子貢曰、吾北鄙之人也。將南之楚。於此有絺紵五兩。吾不敢以當子身、敢置之水浦。婦人對曰、客之行、差遲乖人。分其資財、棄之野鄙。吾年甚少、何敢受子。子不早去、今竊有狂夫守之者矣。詩曰、南有喬木、不可休息。漢有遊女、不可求思、此之謂也。

孔子、南遊し、楚に適き、阿谷の隧に至る。處子の瑱を佩びて

浣する者あり。孔子曰く「彼の婦人、其れ與に言ふ可し」と。觴を抽り、以て子貢に授けて、曰く「善く之れに辭を為し、以て其の語を觀よ」と。子貢曰く「吾れ北鄙の人なり。將に南のかた楚に之かんとするに、天の暑きに逢ひ、思心潭潭たり。願はくば一飲を乞ひ、以て我が心を表わさん」と。婦人對へて曰く「阿谷の隧は、隱曲の汜、其の水、清を載せ濁を載せ、流れて海に趨く。飲まんと欲さば則ち飲め、何ぞ婦人に問ふや」と。子貢の觴を受け、流れに迎つて之れを挹み、^⑥免然として之れを棄て、流れに促つて之れを挹み、^⑦免然として之れを溢たす。坐りて之れを沙上に置きて、曰く「禮、固より親授せず」と。子貢以て告ぐ。孔子曰く「丘、之れを知れり」と。琴を抽り其の軫を去りて、以て子貢に授け、曰く「善く之れに辭を為し、以て其の語を觀よ」と。子貢曰く「子の言を嚮くるに、穆らかなること清風の如し。我が語に悖らず、我が心を和暢す。此に琴ありて軫なし。願はくば子に借りて以て其の音を調せん」と。婦人對へて曰く「吾れ野鄙の人なり。僻陋にして無心。五音知らず。安んぞ能く琴を調せん」と。子貢以て告ぐ。孔子曰く「丘、之れを知れり」と。絺綌五兩を抽り、以て子貢に授け、曰く「善く之れに辭を為し、以て其の語を觀よ」と。子貢曰く「吾れ北鄙の人なり。將に南のかた楚に之かんとす。此に絺綌五兩あり。吾れ敢て以て子の身に當たらず、敢て之れを水浦に置く」と。婦人對へて曰く「客の行ひ、差遲にして人に乖く。其の資財を分かつに、之れを野鄙に棄つ。吾が年甚だ少しとも、何ぞ敢て子に受けん。子、早く去らざれば、今竊かに狂夫の之れを守る者あり」と。詩に曰く「南に喬木あり、休ふ可からず。漢に遊女あり、求む可からず」と。此れの謂ひなり。

①「孔子南遊」「疏證」は、『列女傳』辯通、阿谷處女を挙げる。

②「隧」「考」は「隧、道也」として、『穆天子傳』注の「隊、謂谷中險阻道也。音遂」を引く。『今註今譯』は「隧、疑當從趙善詒、韓詩外傳補正、作陽」と言う。今、「考」に従う。

③「處子」『今註今譯』に「處女」と言う。

④「潭潭」『今註今譯』は「火熱」と解し、王昭圓の『列女傳補注』を引く。

⑤「其水戴清戴濁」「考」に「小雅、四月、相彼泉水、戴清戴濁」とある。

⑥「免然而棄之」「考」は「免字必誤。強讀爲易渙卦之渙。訓散釋。（中略）宋本列女傳、無此句。今本、免然作投字」と言う。

⑦「免然而溢之」「考」は「免讀爲渙。鄭風、溱洧篇、溱與洧、方渙々兮。毛傳、渙々、春水盛也。鄭箋、仲春之時、水以釋、水則渙々然。列女傳、免然作滿字」と言う。

⑧「軫」琴柱（ことじ）、琴の糸をささえるこま。

⑨「穆如清風」「考」に「大雅、蒸民、吉甫作、誦穆如清風」とある。

⑩「抽絺綌五兩」「考」は周南、葛覃篇を引き「毛傳、精曰絺、麤曰綌」と言う。

⑪「客之行、差遲乖人」「考」は『列女傳』の「行客之人、嗟然永久」と、小雅、六月篇を引き「川目氏曰、乖人、永久之誤」と言う。

⑫「狂夫」『今註今譯』は「凶妄的人。指女子之親屬」と言う。

⑬「詩曰、……」「詩經」周南、漢廣篇。「遺說」は「遊女、謂漢水之神也」と言う。

四 哀公問孔子曰、有智壽乎。孔子曰、然。人有三死而非命也者、自取之也。居處不理、飲食不節、勞過者病共殺之。居下而好干上、嗜慾無厭、求索不止者、刑共殺之。少以敵衆、弱以侮強、忿不量力者、兵共殺之。故有三死而非命者、自取之也。詩云、人而無儀、不死何爲。

哀公、孔子に問ひて曰く「智あるものは壽なるや」と。孔子曰く「然り。人、死するも命にあらざる者、三あるは、みづから之

れを取るなり。居處、理あらず、飲食、節せず、勞の過ぐる者は、病、共に之れを殺す。下に居りて上を干すを好み、嗜慾、厭ふこと無く、求索して止まざる者は、刑、共に之れを殺す。少なくて以て衆きを敵とし、弱くして以て強きを侮り、忿りて力を量らざる者は、兵、共に之れを殺す。故に死するも命にあらざる者、三あるは、みづから之れを取るなり」と。詩に云ふ「人にして儀無くんば、死せずして何爲」と。

①「哀公問孔子曰」「疏證」は「說苑」雜言篇と「孔子家語」五儀解篇を挙げ「校詮」は、「說苑」雜言篇は「外傳」本章に、また「孔子家語」五儀解篇は「說苑」に依拠し、また、本章は「論語」雍也篇の「仁者壽」という孔子の言葉からの案出であろう、と言う。「遺說攷」に「文字付言篇載老子言略同」とある。

②「詩云、……」「詩經」邶風、相鼠篇。

五 傳曰、在天者、莫明乎日月、在地者、莫明於水火、在人者、莫明乎禮義。故日月不高、則所照不遠。水火不積、則光炎不博。禮義不加乎國家、則功名不白。故人之命在天、國之命在禮。君人者、降禮尊賢而王、重法愛民而霸、好利多詐而危、權謀傾覆而亡。詩曰、人而無禮、胡不遄死。

①傳に曰く「天に在りては、日月より明かなるは莫く、地に在りては、水火より明かなるは莫く、人に在りては、禮義より明かなるは莫し。故に日月、高からずんば、則ち照らす所、遠からず。水火、積まずんば、則ち光炎、博からず。禮義、國家に加へずんば、則ち功名、白かならず。故に人の命は天に在り、國の命は禮に在り。人に君たる者、禮を降（隆）にし賢を尊びて王たり、法を重んじ民を愛して霸たり、利を好み詐を多くして危く、權謀傾

覆して亡ぶ」と。詩に曰く「人にして禮無くんば、胡んぞ遄かに死せざる」と。

①「傳曰」「疏證」は、「荀子」天論篇と彊國篇を挙げる。

②「降禮」「考」に「荀子作隆禮」とある。

③「詩曰、……」「詩經」邶風、相鼠篇。

六 君子有辯善之度、以治氣養性、則身後彭祖、脩身自強、則名配堯禹。宜於時則達、厄於窮則處、信禮者也。凡用心之術、由禮則理達、不由禮則悖亂。飲食衣服動靜居處、由禮則知節、不由禮則墊陷生疾。容貌態度進退移步、由禮則夷國。政無禮則不行、王事無禮則不成、國無禮則不寧、王無禮則死亡無日矣。詩曰、人而無禮、胡不遄死。

①君子、辯善の度有りて、以て氣を治め性を養はば、則ち身は彭祖の後たり、身を修め自強すれば、則ち名は堯禹に配せらる。時に宜しければ達し、窮に厄しめば處るは、信に禮なる者なり。凡そ心を用ゐるの術、禮に由らば則ち理達し、禮に由らざれば則ち悖亂す。飲食・衣服・動靜・居處、禮に由らば則ち節を知り、禮に由らざれば則ち墊陷して疾を生ず。容貌・態度・進退・移步、禮に由らば則ち（雅、禮に由らざれば則ち）夷固。政に禮無ければ則ち行はれず、王事に禮無ければ則ち成らず、國に禮無ければ則ち寧からず、王に禮無ければ則ち死亡すること日無し。詩に曰く「人にして禮無くんば、胡んぞ遄かに死せざる」と。

①「辯善之度」「疏證」は、「荀子」脩身篇を挙げる。「考」に「荀子、辯作篇」とある。

②「宜於時則達、厄於窮則處、信禮者也」「荀子」脩身篇には「宜於時通、利以處窮、禮信是也」とある。

③「墊陷」「今註今譯」は「墊陷、瘦弱」と言う。「考」は「墊、溺也。（中略）陷、恐隘」と言う。

④「移歩」「考」に「荀子、移歩作趨行」とある。

⑤「由禮則夷國」「考」は「荀子、作由禮則雅、不由禮則夷固辟違、庸衆而野。此脱。今按、宜批荀子、則下補雅不由禮則五字」と言う。

⑥「詩曰、……」「詩經」鄘風、相鼠篇。

七 傳曰、不仁之至、忽其親。不忠之至、倍其君。不信之至、欺其友。此三者、聖王之所殺而不赦也。詩曰、人而無禮、不死何爲。傳に曰く「不仁の至りは、其の親を忽せにするなり。不忠の至りは、其の君に倍くなり。不信の至りは、其の友を欺くなり」と。此の三者は、聖王の殺して赦さざる所なり。詩に曰く「人にして禮無くんば、死せずして何爲」と。

①「傳曰、……」「考」は、「孟子」公孫丑篇と句法が、梁惠本篇と語意が相似すると言う。「校詮」は傳曰の引用は「欺其友」までであろう、と言う。

②「詩曰、……」「詩經」鄘風、相鼠篇。

八 王子比干殺身以成其忠、柳下惠殺身以成其信、伯夷叔齊殺身以成其廉。此三者者、皆天下之通士也。豈不愛其身哉。為夫義之不立、名之不顯、則士恥之。故殺身以遂其行。由是觀之、卑賤貧窮、非士之恥也。天下學忠而士不與焉、舉信而士不與焉、舉廉而士不與焉。三者存乎身、名傳於世、與日月並而息、天不能殺、地不能生、當桀紂之世不之能汚也。然則非惡生而樂死也、惡富貴好貧賤也。由其理、尊貴及己而仕也不辭也。孔子曰、富而可求、雖執鞭之士吾亦為之。故陋窮而不憫、勞辱而不苟、然後能有致也。詩曰、我心匪石、不可轉也。我心匪席、不可卷也。此之謂也。

①王子比干は身を殺して以て其の忠を成し、柳下惠は身を殺して

以て其の信を成し、伯夷叔齊は身を殺して以て其の廉を成す。此の三子の者は、皆天下の通士なり。豈其の身を愛さざらんや。夫の義の立たず、名の顯かならざるが為に、則ち士これを恥ず。故に身を殺して以て其の行ひを遂ぐ。是れに由りて之れを觀れば、卑賤貧窮は、士の恥に非ざるなり。天下、忠を擧げて士與らず、信を擧げて士與らず、廉を擧げて士與らず。三者、身に存し、名世に傳へ、日月と並に息し、天も殺す能はず、地も埋（生）む能はず、桀紂の世に當りても之れ能く汚さざるなり。然らば則ち生を惡みて死を樂しみ、富貴を惡みて貧賤を好むに非ざるなり。其の理に由らば、尊貴、己れに及ばば仕へて辭せざるなり。孔子曰く「富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も吾亦た之れを為さんと。故に陋窮して憫ならず、勞辱して苟もせず、然る後に能く致すこと有るなり。詩に曰く「我が心は石に匪ず、轉ず可からず。我が心は席に匪ず、卷く可からず」と。此れの謂ひなり。

①「王子比干」「疏證」は、「說苑」立節篇を擧げる。

②「為」「考」に「為字衍。一説為猶若也。按說苑、為上有以字、則作是」とある。

③「天不能殺、地不能生」「考」の「說苑、無此八字。按荀子儒效篇、有此二句、生作埋」と言う説によつて、「生」を「埋」に改める。

④「孔子曰、富而可求、雖執鞭之士吾亦為之」「論語」述而篇。

⑤「故陋窮而不憫」「考」に「孟子公孫丑上、遺佚而不怨、陋窮而不憫。列女貞順、衛宣夫人傳、有此三句」とある。

⑥「詩曰、……」「詩經」鄘風、柏舟篇。

九 原憲居魯、環堵之室、茨以蒿萊、蓬戶甕牖、桷桑而無樞、上漏下濕、匡坐而絃歌。子貢乘肥馬、衣輕裘、中紺而表素。軒不容巷、而往見之。原憲楮冠黎杖而應門。正冠則纓絕、振襟則肘見、

納履則踵決。子貢曰、嘻、先生何病也。原憲仰而應之曰、憲聞之、無財之謂貧、學而不能行之謂病。憲貧也、非病也。若夫希世而行、比周而友、學以為己、仁義之匿、車馬之飾、衣裳之麗、憲不忍為之也。子貢逡巡、面有慙色、不辭而去。原憲乃徐步曳杖、歌商頌而反、聲淪於天地、如出金石。天子不得而臣也、諸侯不得而友也。故養身者忘家、養志者忘身。身且不愛、孰能忝之。詩曰、我心匪石、不可轉也。我心匪席、不可卷也。

①「原憲」、魯に居り、環堵の室、茨つばきくに蒿萊を以てし、蓬の戸に甕の牖、桷桑②にして樞無く、上は漏り下は濕り、匡坐して絃歌す。子貢、肥馬③に乗り、輕裘を衣て、紺の中にし素を表にす。軒にして巷に容らず、往きて之れに見ゆ。原憲、楮の冠に黎の杖して門に應ず。冠を正さんとして纓絶へ、襟を振らんとして肘見あらはれ、履に納れんとして踵決す。子貢曰く「嘻、先生何ぞ病める」と。原憲、仰ぎて之れに應へて曰く「憲、之れを聞く、財無き之れを貧と謂ひ、學びて行ふ能はざる之れを病と謂ふ、と。憲は貧なり、病に非ざるなり。夫の世に希んで行ひ、比周④して友とし、學ぶは以て人の為めにし、教ふるは以て己れの為めにし、仁義は之れ匿し、車馬は之れ飾り、衣裳は之れ麗なるが若きは、憲、之れを為すに忍びざるなり」と。子貢、逡巡し、面に慙ずる色有り、辭せずして去る。原憲、乃ち徐歩して杖を曳き、商頌を歌ひて反り、聲は天地に淪つること、金石に出づるが如し。天子も得て臣とせず、諸侯も得て友とせざるなり。故に身を養ふ者は家を忘れ、志を養ふ者は身を忘る。身すら且つ愛さずんば、孰か能く之れを忝ふせん。詩に曰く「我が心は石に匪ず、轉ず可からず。我が心は席に匪ず、卷く可からず」と。

①「原憲」「疏證」は、「莊子」讓王篇、「新序」節士篇を挙げる。「考」及び「校

詮」に依ると、讓王篇は「正冠則纓絶」以下は、曾子の事として載せる。

②「桷桑而無樞」「校詮」に「莊子」は「桑以為樞」に作る、とある。

③「乘肥馬、衣輕裘」「考」に「論語、雍也篇、字面」とある。

④「比周而友」「考」に「新序、友作交。論語、為政篇、君子周而不比、小人比而不周」とある。

⑤「聲淪於天地」「考」に「莊子、新序、並淪作滿」とある。

⑥「詩曰、……」「詩經」邶風、柏舟篇。

十 傳曰、所謂士者、雖不能盡備乎道術、必有由也。雖不能盡乎美著、必有處也。言不務多、務審所行而已。行既已尊之、言既已由之、若肌膚性命之不可易也。詩曰、我心匪石、不可轉也。我心匪席、不可卷也。

傳に曰く「所謂の士なる者は、道術を盡くは備ふ能はずと雖も、必ず由る有るなり。美著を盡くす能はずと雖も、必ず處る有るなり。言は多きに務めず、行ふ所に審なるに務むるのみ。行ひは既に已に之れに尊ひ、言は既に已に之れに由ること、肌膚・性命の易ゆ可からざるが若きなり」と。詩に曰く「我が心は石に匪ず、轉ず可からず。我が心は席に匪ず、卷く可からず」と。

①「傳曰」「疏證」は、「荀子」哀公篇、「大戴禮記」哀公問五義篇、「孔子家語」五儀解篇を挙げる。

②「盡備」「校詮」は「盡備のいづれかの一字が衍文であろう。趙善詒（『今註今譯』所引）は、盡字を刪る」と言う。

③「美著」「今註今譯」は「當從趙懷玉校、作美善」と言う。

④「尊」「考」は「尊當作遵」と言う。

⑤「詩曰、……」「詩經」邶風、柏舟篇。

一一 傳曰、君子潔其身而同者合焉、善其音而類者應焉。馬鳴而

馬應之、牛鳴而牛應之、非知也、其勢然也。故新沐者必彈冠、新浴者必振衣。莫能以己之皜皜、容人之混汚然。詩曰、我心匪鑑、不可以茹。

傳に曰く「君子は其の身を潔くして同じき者も合し、其の音を善くして類する者も應ず。馬鳴きて馬之れに應じ、牛鳴きて牛之れに應ずるは、知に非ざるなり、其の勢然るなり。故に新たに沐する者は必ず冠を弾き、新たに浴する者は必ず衣を振るふ。己れの皜皜たるを以て人の混汚然を容ること能ふ莫し」と。詩に曰く「我が心は鑑に匪ず、以て茹る可からず」と。

①「傳曰」「疏證」は、「荀子」不苟篇を挙げる。「校詮」は、不苟篇は「楚辭」漁夫篇の「新沐者必彈冠、新浴者必振衣。安能以身之察察、受物之汶汶者乎」に依拠する、と言う。

②「音」「考」に「荀子、音作言」とある。

③「皜皜」「今註今譯」は「潔白の様子」と言う。

④「詩曰、……」「詩經」邶風、柏舟篇。

一二 荆伐陳、陳西門壞。因其降民使脩之。孔子過而不式。子貢執轡而問曰、禮、過三人則下、二人則式。今陳之脩門者衆矣。夫子不為式、何也。孔子曰、國亡而弗知、不智也。知而不爭、非忠也。亡而不死、非勇也。脩門者雖衆、不能行一於此。吾故弗式也。詩曰、憂心悄悄、愠于群小。小人成群、何足禮哉。

①「傳曰」「疏證」は、「淮南子」詮言訓、「文子」符言篇を挙げる。「考」及び「校詮」は、「傳曰」は「老子」だと言う。「與」「今註今譯」に「疑當作譽、聲譽」とある。②「與」「校詮」は「かなふ」と訓ずる。③「勝」「校詮」は「かなふ」と訓ずる。④「位」「考」は「位當作名」と言う。⑤「詩曰、……」「詩經」邶風、雄雉篇。毛傳・集傳に「伎は害」また「臧は

るなり。亡んで死せざるは、勇に非ざるなり。門を脩むる者は衆しと雖も、一も此れを行ふ能はず。吾、故に式せ弗るなり」と。詩に曰く「憂心、悄悄として、群小に愠らる」と。小人、群を成すも、何ぞ禮するに足らんや。

①「荆伐陳」「疏證」は、「說苑」立節篇を挙げる。

②「子貢」「考」に「說苑作子路」とある。

③「亡」「考」は「說苑、亡作忠」と言い、「今註今譯」は「當從趙善詒校、作争」と言う。

④「詩曰、……」「詩經」邶風、柏舟篇。

一三 傳曰、喜名者必多怨、好與者必多辱。唯滅跡於人、能隨天地自然、為能勝理、而無愛名。名興則道不用、道行則人無位矣。夫利為害本、而福為禍先。唯不求利者為無害、不求福者為無禍。詩曰、不伎不求、何用不臧。

①「傳曰」「名を喜ぶ者は必ず怨み多く、與を好む者は必ず辱多し。唯、跡を人に滅するもののみ、能く天地自然に随ひ、能く理に勝ふことを為し、名を愛すること無し。名興れば則ち道用らず、道行はば則ち人位無し。夫れ利は害の本たりて、福は禍の先たり。唯、利を求めざる者のみ無害たりて、福を求めざる者のみ無禍たり」と。詩に曰く「伎はず求めずんば、何を用てか臧からざらん」と。

①「傳曰」「疏證」は、「淮南子」詮言訓、「文子」符言篇を挙げる。「考」及び「校詮」は、「傳曰」は「老子」だと言う。

②「與」「今註今譯」に「疑當作譽、聲譽」とある。

③「勝」「校詮」は「かなふ」と訓ずる。

④「位」「考」は「位當作名」と言う。

⑤「詩曰、……」「詩經」邶風、雄雉篇。毛傳・集傳に「伎は害」また「臧は

善なり」とある。

一四 傳曰、聰者自聞、明者自見。聰明則仁愛著而廉恥分矣。故非道而行之、雖勞不至。非其有而求之、雖強不得。故智者不為非其事、廉者不求非其有。是以害遠而名彰也。詩云、不伎不求、何用不臧。

傳に曰く、聰者^①は自ら聞き、明者は自ら見ゆ。聰明なるものは則ち仁愛著らかにして廉恥分かる。故に道に非ずして之れを行なふは、勞すと雖も至らず。其の有に非ずして之れを求むるは、強^③むと雖も得ず。故に智者は其の事に非ざるは為さず、廉者は其の有に非ざるは求めず。是こを以て害遠くして名彰かなり。詩に云ふ「伎はず求めずんば、何を用てか臧からざらん」と。

①「傳曰」「疏證」は、「說苑」雜言篇を挙げる。

②「聰者自聞、明者自見」「校詮」は、これと相似する考えが『老子』三十三章・『韓非子』喻老篇・『莊子』駢拇篇にあると云う。

③「強」「今註今譯」に「勉強」とある。

④「詩云、……」「詩經」邶風、雄雉篇。「考」は、広漢魏叢書は云を曰に作る、と云う。

一五 傳曰、安命養性者、不待積委而富。名號傳乎世者、不待勢位而顯。德義暢乎中而無外求也。信哉、賢者之不以天下為名利者也。詩曰、不伎不求、何用不臧。

傳に曰く、命に安んじ性を養なふ者は、積委^②を待たずして富む。名號、世に傳ふる者は、勢位を待たずして顯はる。德義、中に暢^③びて外に求むる無きなり。信なるかな、賢者は之れ天下を以て名利と為さざる者なり。詩に曰く「伎はず求めずんば、何を用てか臧からざらん」と。

①「傳曰」「校詮」に「本章に引く傳は、佚書」と。

②「積委」「今註今譯」に「積蓄」とある。

③「暢」「今註今譯」に「通達」とある。

④「詩曰、……」「詩經」邶風、雄雉篇。

一六 古者、天子左五鐘、將出、則撞黃鐘、而右五鐘皆應之、馬鳴中律、駕者有文、御者有數。立則磬折、拱則抱鼓。行步中規、折旋中矩。然後太師奏升車之樂、告出也。入則撞鞀、以治容貌。容貌得則顏色齊、顏色齊則肌膚安。鞀有聲、鶴震馬鳴、及僕介之蟲、無不延頸以聽。在內者皆玉色、在外者皆金聲。然後少師奏升堂之樂、即席告入也。此言音樂相和、物類相感、同聲相應之義也。詩云、鐘鼓樂之。此之謂也。

むかし、天子の左五鐘、將に出でんとすれば、則ち黄鐘^②を撞き、右五鐘皆之れに應じ、馬鳴きて律に中り、駕者、文有り、御者、數有り。立てば則ち磬折^③、拱すれば則ち抱鼓。行歩は規に中り、折旋は矩に中る。然る後に太師、升車の樂を奏し、出づるを告ぐるなり。入れば則ち鞀^④を撞き、以て容貌を治む。容貌得れば則ち顏色齊ひ、顏色齊はば則ち肌膚安んず。鞀、聲有らば、鶴震ひ馬鳴き、僕介の蟲に及ぶも、頸を延して以て聴かざるは無し。内に在る者は皆玉色、外に在る者は皆金聲。然る後に少師、升車の樂を奏し、席に即き入るを告ぐるなり。此れ音樂相ひ和し、物類相ひ感じ、同聲相ひ應ずるの義を言ふなり。詩に云ふ「鐘鼓之れを樂す」と。此れの謂ひなり。

①「古者、天子左五鐘」「疏證」は、「尚書大傳」卷二を挙げる。「考」及び「校詮」及び「研究」に依れば、本章は「禮記」曲禮下篇・「大戴禮記」保傳篇・「春秋繁露」五行相生篇・「說苑」修文篇・「中論」法象篇と一部分の表現が

重複し、『新唐書』禮樂志・『通典』唐開元禮には天子の出入の際の音楽演奏に関する記述がある。また『考』は「尚書大傳、此下有右五鐘三字」と言い、『今註今譯』は「左字下、當據趙善詒校、補右字」と言う。

②「黄鐘」黄鐘・大族・姑洗・蕤賓・夷則・無射の六律と六呂とで、十二律（一オクターブ）である。

③「磬折」『今註今譯』に「身體偃曲、像磬背一般」とある。

④「拱」『今註今譯』に「拱手。両手相合以表示敬意」とある。

⑤「詩云、……」『詩經』周南、關雎篇。

一七 枯魚銜索、幾何不蠹。二親之壽、忽如過隙、樹木欲茂、霜露不凋使。賢士欲成其名、二親不待。家貧親老、不擇官而仕。詩曰、雖則如燬、父母孔邇。此之謂也。

① 枯魚、索に銜し、蠹せざるに幾何ぞ。二親の壽、忽なること過隙の如し。樹木は茂らんと欲すれども、霜露は凋使せしめざるや。賢士は其の名を成さんと欲すれども、二親は待たず。家貧しく親老ゆれば、官を擇ばずして仕ふ。詩に曰く「則ち燬くが如しと雖も、父母孔だ邇し」と。此れの謂ひなり。

①「枯魚銜索」『疏證』は、『說苑』建本篇と『孔子家語』致思篇を挙げる。「校詮」は、本章から『外傳』七卷七章へ、更に同九卷三章へ流伝し、また『說苑』建本篇は『外傳』一卷一章と同七卷七章を組合せて作成され、『孔子家語』致思篇は『說苑』を踏襲する、と言う。

②「蠹」『今註今譯』に「敗壞、腐爛」と。

③「霜露不凋使」『考』に「說苑、無凋字」と。

④「詩曰、……」『詩經』周南、汝墳篇。

一八 孔子曰、君子有三憂。弗知、可無憂與。知而不學、可無憂與。學而不行、可無憂與。詩曰、未見君子、憂心悒悒。

① 孔子曰く「君子に三憂有り。知ら弗んば、憂ひ無かる可けんや。知りて學ばずんば、憂ひ無かる可けんや。學びて行はずんば、憂ひ無かる可けんや」と。詩に曰く「未だ君子を見ず、憂心悒悒」と。

①「孔子曰」『疏證』は、『禮記』雜記下篇を挙げる。「校詮」は、『孔子家語』好生篇は、これを踏襲する、と言う。

②「詩曰、……」『詩經』召南、草蟲篇。

一九 魯公甫文伯死、其母不哭也。季孫聞之曰、公甫文伯之母、貞女也。子死不哭、必有方矣。使人問焉。對曰、昔是子也。吾使之事仲尼。仲尼去魯、送之、不出魯郊。贈之不與家珍。病不見士之視者。死不見士之流淚者。死之日、宮女續絰而從者、十人。此不足於士、而有餘於婦人也。吾是以不哭也。詩曰、乃如之人兮、德音無良。

① 魯の公甫文伯死するも、其の母哭せざるなり。季孫之れを聞きて曰く「公甫文伯の母は、貞女なり。子死して哭せざるは、必ず方有らん」と。人をして問はしむ。對へて曰く「昔は是れ子なり。吾之れをして仲尼に事へしむ。仲尼、魯を去り、之れを送りて、魯の郊に出でず。之れに贈るに家珍を與へず。病まば士の視る者を見ず。死さば士の流淚する者を見ず。死の日、宮女の續絰して從ふ者、十人。此れ士に足らずして、婦人に餘り有るなり。吾是こを以て哭せざるなり」と。詩に曰く「乃ち之くの如き人、德音、良無し」と。

①「魯公甫文伯死」『疏證』は、『國語』魯語下篇・『禮記』檀弓下篇・『戰國策』趙策を挙げる。「校詮」は、『列女傳』母儀、魯季敬姜及び『孔子家語』曲禮子夏問篇及び『史記』虞卿列傳及び『新序』善謀上篇にも敬姜の故事が見ら

れる、と言う。

- ② 「視者」「考」は「視謂問疾也」と言う。
- ③ 「續經」「今註今譯」に「喪服」とある。
- ④ 「從」「今註今譯」に「謂、隨從他而死」とある。
- ⑤ 「詩曰、……」「詩經」邶風、日月篇。

二十 傳曰、天地有合、則生氣有精矣。陰陽消息、則變化有時矣。時得則治、時失則亂。故人生而不具者五。目無見、不能食、不能行、不能言、不能施化。三月微的、而後能見。七月而生齒、而後能食。暮年鬻就、而後能行。三年腦合、而後能言。十六精通、而後能施化。陰陽相反、陰以陽變、陽以陰變。故男八月生齒、八歲而齟齒、十六而精化小通。女七月生齒、七歲而齟齒、十四而精化小通。是故陽以陰變、陰以陽變。故不肖者、精化始具、而生氣感動、觸情縱欲、反施化、是以年壽亟夭、而性不長也。詩曰、乃如之人兮、懷婚姻也、太無信也、不知命也。賢者不然。精氣闖溢、而後傷時不可過也。不見道端、乃陳情欲、以歌道義。詩曰、靜女其姝、俟我乎城隅、愛而不見、搔首踟蹰。瞻彼日月、悠悠我思、道之云遠、曷云能來。急時辭也、是故稱之日月也。

傳^①に曰く、天地合する有らば、則ち生氣に精有り。陰陽消息すれば、則ち變化に時有り。時得れば則ち治り、時失はば則ち亂る。故に人生まれて具はらざる者は五。目見る無く、食ふ能はず、行く能はず、言ふ能はず、施化する能はず。三月にして微的^②、而る後に能く見ゆ。七月にして齒を生じ、而る後に能く食ふ。暮年にして鬻就り、而る後に能く行く。三年にして腦合して、而る後に能く言ふ。十六にして精通し、而る後に能く施化す。陰陽相ひ反し、陰は陽を以て變じ、陽は陰を以て變ず。故に男は八月に齒を

生じ、八歳にして齒を齟^③し、十六にして精化小通す。女は七月に齒を生じ、七歳にして齒を齟し、十四にして精化小通す。是の故に陽は陰を以て變じ、陰は陽を以て變ず。故に不肖なる者は、精化始めて具はり、生氣感動し、情に觸れ欲を縦にし、施化に反し、是こを以て年壽亟かに天にして、性、長ならざるなり。詩に曰く「乃ち之くの如き人は、婚姻を懷ふ、太だ信無きなり、命を知らざるなり」と。賢者は然らず。精氣闖溢して、而る後に時の過ぐる可からざるを傷む。道の端を見ず、乃ち情欲を陳べ、以て道義を歌ふ。詩に曰く「靜女其れ姝^④し、我を城隅に俟つ、愛すれども見ず、首を搔きて踟蹰す」。「彼の日月を瞻て、悠悠として我思ふ、道の云に遠き、曷か云に能く來たらん」と。急時の辭なり、是の故に之れを日月と稱するなり。

- ① 「傳曰」「疏證」は、「說苑」辯物篇を挙げる。「校詮」は、「大戴禮記」本命篇と「孔子家語」本命解とは一部分重複する、と言う。
- ② 「微的」「今註今譯」は、趙善詒に従って徹胸に作る可し、眼睛轉動の意、と言う。
- ③ 「齟」齟も齟も、齒が抜け変わる事。
- ④ 「詩曰、……」「詩經」邶風、蟋蟀篇。
- ⑤ 「詩曰、……」「詩經」邶風、靜女篇。
- ⑥ 「詩曰、……」「詩經」邶風、雄雉篇。

二一 楚白公之難、有仕之善者、辭其母、將死君。其母曰、棄母而死君、可乎。曰、聞事君者、内其祿而外其身。今之所以養母者、君之祿也、請往死之。比至朝、三廢車中。其僕曰、子懼、何不反也。曰、懼吾私也、死君吾公也。吾聞君子不以私害公。遂死之。君子聞之曰、好義哉。必濟矣夫。詩云、深則厲、淺則揭。此之謂

也。

楚の白公の難に、仕の善なる者有り、其の母に辭し、將に君に死せんとす。其の母曰く「母を棄てて君に死す、可なるや」と。曰く「聞く、君に事ふる者は、其の祿を内にして其の身を外にすと。今、之れ母を養ふ所以は、君の祿なり、請ふ往きて之れに死せん」と。朝に至るに比くして、三たび車中に廢る。其の僕曰く「子懼る、何ぞ反らざるや」と。曰く「懼るるは、吾が私なり、君に死するは、吾が公なり。吾聞く、君子は私を以て公を害さず」と。遂に之れに死す。君子之れを聞きて曰く「好き義かな。必ず濟さんかな」と。詩に云ふ「深ければ則ち厲し、淺ければ則ち掲す」と。此れの謂ひなり。

①「楚白公之難」「疏證」は、「新序」義勇篇を挙げる。

②「仕之善者」「考」は、「新序」は莊善に作り、「孟子」離婁上篇の趙注は陳不瞻の事とする、と言う。

③「比」「今註今譯」に「近、將近」とある。

④「廢」「今註今譯」に「墜、跌倒」とある。

⑤「詩云、……」「詩經」邶風、匏有苦葉篇。

二二 晉靈公之時、宋人殺昭公。趙宣子請師於靈公而救之。靈公曰、非晉國之急也。宣子曰、不然。夫大者天地、其次君臣、所以為順也。今殺其君、所以反天地、逆人道也、天必加災焉。晉為盟主而不救、天罰懼及矣。詩云、凡民有喪、匍匐救之。而況國君乎。於是靈公乃與師而從之。宋人聞之、儼然感說、而晉國曰昌。何則、以其誅逆存順。詩曰、凡民有喪、匍匐救之。趙宣子之謂也。

①晉の靈公の時、宋人、昭公を殺す。趙の宣子、師を靈公に請ひて之れを救はんとす。靈公曰く「晉國の急に非ざるなり」と。宣子曰く「然らず。夫れ大なる者は天地、其の次は君臣、順たる所

以なり。今、其の君を殺すは、天地に反き、人道に逆ふ所以なり、天必ず災を加へん。晉、盟主たりて救はずんば、天罰懼らく及ばん。詩に云ふ「凡そ民の喪有る、匍匐して之れを救へり」と。而るを況んや國君をや」と。是に於いて靈公乃ち師を與して之れに従ふ。宋人之れを聞き、儼然として感說し、晉國日に昌ゆ。何となれば則ち、其の逆を誅し順を存するを以てなり。詩に曰く「凡そ民の喪有るや、匍匐して之れを救へり」と。趙の宣子の謂ひなり。

①「晉靈公之時」「疏證」は、「國語」晉語五を挙げる。

②「詩云、……」「詩經」邶風、谷風篇。

③「與」「考」は「恐與」と言う。

二三 傳曰、水濁則魚喞、令苛則民亂。城峭則崩、岸峭則破。故吳起削刑而車裂、商鞅峻法而支解。治國者譬若乎張琴然。大絃急則小絃絕矣。故急轡御者、非千里之御也。有聲之聲、不過百里、無聲之聲、延及四海。故祿過其功者削、名過其實者損。情行合名、禍福不虛至矣。詩云、何其處也、必有與也。何其久也、必有以也。故惟其無為、能長生久視、而無累於物矣。

①傳に曰く「水濁らば則ち魚喞ひ、令苛ければ則ち民亂る。城峭しければ則ち崩れ、岸峭しければ則ち破つ」と。故に吳起、刑を削りて車裂され、商鞅、法を峻にして支解さる。國を治むる者は譬へば琴を張るが若く然り。大絃、急ならば則ち小絃絶ゆ。故に轡御に急なる者は、千里の御に非ざるなり。有聲の聲は、百里に過ぎず、無聲の聲は、四海に延久す。故に祿は其の功に過ぐる者は削られ、名は其の實に過ぐる者は損はる。情行、名に合し、禍福、虚ならずして至る。詩に云ふ「何ぞ其れ處れるや、必ず與有

らん。何ぞ其れ久しきや、必ず以有らん」と。故に惟其れ無為の
み、能く長生久視にして、物に累ふこと無し。

①「傳曰」「疏證」は、『淮南子』繆稱訓と『說苑』政理篇とを挙げる。

②「喟」「あぎとふ」と訓む。魚が水面で口をパクパクすること。

③「阿」「今註今譯」は、『淮南子』に従って「陀」（墮落の意）に改む可し、
と言う。

④「車裂」「考」は、『史記』に「射刺」とあって「車裂」とはない、と言う。

⑤「支解」「考」は、『史記』に「車裂」とあって「支解」とはない、と言う。

⑥「詩云、……」「詩經」邶風、旄丘篇。

⑦「長生久視」「校詮」は、この語は『老子』五十九章や『荀子』榮辱篇にも
見える、と言う。

二四 傳曰、衣服容貌者、所以説目也。應對言語者、所以説耳也。
好惡去就者、所以説心也。故君子衣服中、容貌得、則民之目悦矣。
言語遜、應對給、則民之耳悦矣。就仁去不仁、則民之心悦矣。三
者存乎身、雖不在位、謂之素行。故中心存善、而日新之、則獨居
而樂、徳充而形。詩曰、何其處也、必有與也。何其久也、必有以
也。

①傳に曰く「衣服容貌は、目を説ばす所以なり。應對言語は、耳
を説ばす所以なり。好惡去就は、心を説ばす所以なり」と。故に
君子は衣服中りて、容貌得れば、則ち民の目悦ぶ。言語遜にして、
應對給すれば、則ち民の耳悦ぶ。仁に就き不仁を去らば、則ち民
の心悦ぶ。三者、身に存すれば、位に在らずと雖も、之れを素行
と謂ふ。故に中心、善を存して、日に之れを新にすれば、則ち獨
居して樂しみ、徳充ちて形はる。詩に曰く「何ぞ其れ處れるや、
必ず與有らん。何ぞ其れ久しきや、必ず以有らん」と。

①「傳曰」「疏證」は、『說苑』脩文篇を挙げる。
②「詩曰、……」「詩經」邶風、旄丘篇。

二五 仁道有四。謙為下。有聖仁者、有智仁者、有徳仁者、有謙
仁者。上知天、能用其時。下知地、能用其財。中知人、能安樂之。
是聖仁者也。上亦知天、能用其時。下知地、能用其財。中知人、
能使人肆之。是智仁也。寬而容衆、百姓信之。道所以至、弗辱以
時。是徳仁者也。廉潔直方、疾亂不治、惡邪不匡。雖居郷里、若
坐塗炭。命入朝廷、如赴湯火。非其民、不使、非其食、弗嘗。疾
亂世而輕死、弗顧弟兄、以法度之、比於不詳。是謙仁者也。傳曰、
山銳則不高、水徑則不深。仁謙則其徳不厚、志與天地擬者、其人
不祥。是伯夷叔齊卞隨介子推原憲鮑焦袁旌目申徒狄之行也。其所
受天命之度、適至是而亡、弗能改也。雖枯槁弗捨也。詩云、亦已
焉哉、天實為之、謂之何哉。謙仁雖下、然聖人不廢者、匡民隱括
有在是中也。

①仁道に四有り。謙、下為り。聖仁なる者有り、智仁なる者有り、
徳仁なる者有り、謙仁なる者有り。上は天を知り、能く其の時を
用ふ。下は地を知り、能く其の財を用ゆ。中は人を知り、能く之
れを安樂せしむ。是れ聖仁なる者なり。上も亦た天を知り、能く
其の時を用ゆ。下は地を知り、能く其の財を用ゆ。中は人を知り、
能く人をして之れを肆にせしむ。是れ智仁なり。寬にして衆を容
れ、百姓之れを信ず。至る所以に道き、時を以て辱めず。是れ徳
仁なる者なり。廉潔直方にして、亂れて治まらざるを疾み、邪に
して匡しからざるを惡む。郷里に居ると雖も、塗炭に坐るが若し。
命にて朝廷に入らば、湯火に赴くが如し。其の民に非ずんば、使
はず、其の食に非ずんば、嘗せず。亂世を疾んで死を輕んじ、弟

兄を顧みず、法を以て之れを度り、不詳に比す。是れ謙仁なる者なり。傳に曰く「山銳ければ則ち高からず、水徑かなれば則ち深からず。仁謙なれば則ち其の徳厚からず、志、天地と擬する者は、其の人祥ひならず」と。是れ伯夷・叔齊・卞隨・介子推・原憲・鮑焦・袁旌目・申徒狄の行ひなり。其の受くる所の天命の度、適に是こに至りて亡み、改む能はざるなり。枯槁すと雖も捨てざるなり。詩に云ふ「亦た已んぬかな、天、實に之れを為す、之れを何とか謂はんや」と。謙仁は下と雖も、然も聖人廢さざるは、民を匡し隱括す、是の中に在る者有ればなり。

①「仁道有四。謙為下」「校詮」は、本章が謙についての総論であり、後統の二章は廉の各論である、と言う。「謙」は『今註今譯』に「廉」と通ず、とある。

②「肆」「考」は「肆」と言い、『今註今譯』は「正直」と言う。今、「ほしいまま」と訓む。

③「道所以至、弗辱以時」「考」は「或有誤」と言うが、今、「道」を「導」に解す。

④「詩云、……」「詩經」邶風、北門篇。「毛詩」には「亦」字が無い。

二六 申徒狄非其世、將自投於河。崔嘉聞而止之、曰、吾聞聖人仁士之於天地之間也、民之父母也。今為儒雅之故、不救溺人、可乎。申徒狄曰、不然。桀殺關龍逢、紂殺王子比干、而亡天下。吳殺子胥、陳殺泄冶、而滅其國。故亡國殘家、非無聖智也、不用故也。遂抱石而沈於河。君子聞之、曰、廉矣。如仁歟、則吾未之見也。詩曰、天實為之、謂之何哉。

①申徒狄は其の世を非として、將にみづから河に投ぜんとす。崔嘉聞きて之れを止めて、曰く「吾聞く聖人仁士の天地の間に於け

るや、民の父母なり。今、儒雅たるの故に、溺人を救はざるは、可なるや」と。申徒狄曰く「然らず。桀は關龍逢を殺し、紂は王子比干を殺して、天下を亡ぼす。呉は子胥を殺し、陳は泄冶を殺して、其の國を滅ぼす。故に國を亡ぼし家を殘するは、聖智無きに非ざるなり、用ゐざるが故なり」と。遂に石を抱きて河に沈む。君子之れを聞きて、曰く「廉なるかな。仁の如きや、則ち吾未だ之を見ざるなり」と。詩に曰く「天、實に之れを為す、之れを何とか謂はんや」と。

①「申徒狄」「疏證」は、『新序』節士篇を挙げる。

②「儒雅」「考」も「校詮」も『今註今譯』も『新序』に依つて「濡足」に改む可し、と言うが、「儒雅」を「聖人仁士」に、「溺人」を「民」に解すれば、このままでよい。

③「詩曰、……」「詩經」邶風、北門篇。

二七 鮑焦衣弊膚見、挈畚持蔬、遇子貢於道。子貢曰、吾子何以至於此也。鮑焦曰、天下之遺徳教者、衆矣。吾何以不至於此也。吾聞之。世不己知而行之不已者、爽行也。上不己用而干之不止者、是毀廉也。行爽毀廉、然且弗舍、惑於利者也。子貢曰、吾聞之。非其世者、不生其利。汚其君者、不履其土。非其世而持其蔬。詩曰、溥天之下、莫非王土。此誰有之哉。鮑焦曰、於戲。吾聞賢者重進而輕退、廉者易愧而輕死。於是棄其蔬而立槁於洛水之上。君子聞之、曰、廉夫。剛哉。夫山銳則不高、水徑則不深、行謙者徳不厚、志與天地擬者、其為人無祥。鮑焦可謂不祥矣。其節度淺深、適至於是矣。詩云、亦已焉哉、天實為之、謂之何哉。

①鮑焦は衣弊れ膚見はれ、畚を挈げ蔬を持ち、子貢に道に遇ふ。子貢曰く「吾子、何を以て此こに至るや」と。鮑焦曰く「天下の

徳教者を遣つるや、衆し。吾何を以て此に至らざるや。吾之れを聞く。世、己れを知らずして之れを行ひて已まざる者は、爽行なり。上、己れを用ひずして之れを干めて已まざる者は、是れ廉を毀つなり。爽を行ひ廉を毀ち、然も且つ舍めざるは、利に惑ふ者なり」と。子貢曰く「吾之れを聞く。其の世を非とする者は、其の利に生きず。其の君を汚るとする者は、其の土を履まず、と。其の世を非として其の疏を持つ。詩に曰く『溥天の下、王土に非ざるは莫し』と。此れ誰か之れ有らん」と。鮑焦曰く「於戯。吾聞く賢者は進むを重んじて退くを軽んじ、廉者は愧易くして死を軽んず」と。是ここに於て其の疏を棄てて洛水の上に立ち橋る。君子之れを聞きて、曰く「廉なるかな。剛なるかな。夫れ山鋭ければ則ち高からず、水徑かなれば則ち深からず、謙を行ふ者は徳厚からず、志、天地と擬する者は、其の人たるや祥ひならず。鮑焦、祥ひならずと謂ふ可し。其の節度の淺深、適に是ここに至る」と。詩に云ふ「亦た已んぬるかな。天、實に之れを為す。之れを何と

- か謂はんや」と。
- ① 「鮑焦」「疏證」は、「新序」節士篇を挙げる。
 - ② 「爽行」「今註今譯」に「錯誤的行為」とある。
 - ③ 「詩曰、……」「詩經」小雅、北山篇。
 - ④ 「詩云、……」「詩經」邶風、北門篇。「毛詩」には「亦」字が無い。

二八 昔者、周道之盛、邵伯在朝。有司請營邵以居。邵伯曰、嗟以吾一身、而勞百姓、此非吾先君文王之志也。於是出而就蒸庶於阡陌隴畝之間、而聽斷焉。邵伯暴處遠野、廬於樹下。百姓大悅、耕桑者倍力以勸。於是歲大稔、民給家足。其後在位者驕奢、不恤元元、稅賦繁數、百姓困乏、耕桑失時。於是詩人見召伯之所休息

樹下、美而歌之。詩曰、蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所芟。此之謂也。

① むかし、周道の盛んなる、邵伯、朝に在り。有司、邵に營み以て居とするを請ふ。邵伯曰く「嗟。吾が一身を以て、百姓を勞す、此れ吾が先君文王之志に非ざるなり」と。是ここに於て出でて蒸庶に阡陌隴畝の間に就きて、斷を聴く。邵伯は暴處遠野におり、樹下に廬す。百姓大ひに悦び、耕桑する者、力を倍にして以て勸む。是ここに於て歳大ひに稔り、民給し家足る。其の後、位に在る者、驕奢して、元元を恤しまず、稅賦繁數にして、百姓困乏し、耕桑、時を失ふ。是ここに於て詩人、召伯の休息する所の樹下を見て、美として之れを歌ふ。詩に曰く「蔽芾たる甘棠は、剪ること勿れ伐ること勿れ、召伯の芟りし所」と。此れの謂ひなり。

- ① 「昔者、周道之盛」「疏證」は、「說苑」貴徳篇を挙げる。「校詮」は、邵伯の棠下聽斷の故事は、「史記」燕召公世家、甘棠鄭箋にも見える、と言う。
- ② 「元元」「今註今譯」は「百姓」と言う。
- ③ 「詩人」「遺說攷」は「韓詩有王食長孫之學王、謂王吉也」と言う。
- ④ 「詩曰、……」「詩經」召南、甘棠篇。「集疏」は「魯、召亦作邵」と言う。